KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

リアリスト・エウリピデス：エウリピデス『嘆願する女たち』考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 嘆願劇, 「神の法」から「全ギリシアの掟」へ, 現実政治とアテナイ讃歌, スペクタクル キーワード (En): 作成者: 丹下, 和彦 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006173

関西外国語大学 研究論集 第90号（2009年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.90 (September 2009)

リアリスト・エウリピデス

――エウリピデス『嘆願する女たち』考――

丹　下　和　彦

要　旨

本篇は、ギリシアの内戦ペロポネソス戦時下に書かれ上演された同工の作品『ヘラクレスの子ら』と同じく、嘆願劇というジャンルに分類される。素材はアルゴスのテバイ攻めの後日譚であり、作者はそれをアルゴス側の戦死者の遺体収容という観点から捉え、収容を援助するアテナイ軍の旗揚げを義挙として、一篇全体をアテナイ讃歌に作り上げている。加えてここにはより具体的な現実世界が反映されている。前420年代全般のギリシア諸都市国家間の政治的力関係がそれである。嘆願劇の常として、劇末で嘆願者のアルゴス側から報恩と感謝の念が述べられるが、作者はそこにわざわざアテナ女神をデウス・エクス・マキナとして登場させ、誓約の遵守を堅く言い渡させている。エウリピデスはここでリアルな時代認識に裏打ちされた愛国詩人になっている、と言うべきだろう。

キーワード：嘆願劇、「神の法」から「全ギリシアの掟」へ、現実政治とアテナイ讃歌、スペクタクル

はじめに

古い伝承にあるアルゴス軍のテバイ攻めのテバイ側の後日譚を描いたのがソポクレスの『アンティゴネ』であるとすると、アルゴス側のそれはエウリピデスの『嘆願する女たち』になる（アイスキュロスの『エレウシスの人々』も後者と同じ側面からこの素材を扱っているが、残念ながら唯１行の断片しか残存していない）[1]。いずれも遺体収容と埋葬という共通のテーマをもつ。

アンティゴネは逆賊となったポリュネイケスの遺体収容と埋葬をめぐってテバイの王クレオンと対立し、そのあげく死の運命に見舞われることになる。一方、テバイを攻めたアルゴス軍の七人の将軍の母親たちは、同じくテバイ王クレオンに息子たちの遺体収容を求めるが叶わず、王アドラストスともどもアテナイ王テセウスに助力を要請する。

アンティゴネは最初妹のイスメネに遺体収容の協力を求めるが、これが拒絶されたあと単身遺体の埋葬に赴き、禁令を犯したとして捕えられ罰せられる。しかしこれはいわゆる嘆願劇で

はない。主人公アンティゴネの遺体埋葬に関する思想と行動を描いたアンティゴネの劇である。そしてそこに古くから人間社会に存在する葬祭に関する人間共通の掟、劇中のアンティゴネの言葉を借りれば「神の法」という慣習法がからむ。それは「神の法」と王クレオンが発した埋葬禁止令（人間の法）との対立葛藤というかたちを取る。

これに対して『嘆願する女たち』は、同じく遺体収容と埋葬の問題を扱う劇でありながら、それを一人の個人の思想と行動に収斂させて捉えることはせず、問題をより現実的な政治の場に移行させている。遺体の収容を阻む物理的な力に対抗するのはアンティゴネのような個人ではなく、これまた物理的な一つの力であり、そこに展開されるのはきわめて当世風の政治ゲームである。そしてそこに「嘆願」――社会的弱者から強者への――という行為が付け加えられ、クローズアップされている。

嘆願行為が劇中で大きな比重を占める本篇は、いわゆる「嘆願劇」の範疇に入る。嘆願は、一般に社会的また政治的弱者が加害者追跡者からの迫害を逃れるために、ゼウス・ヒケシオス（嘆願者を護るゼウス）の神威を借りて社会的また政治的に強力な者の援助と保護を要請する行為である。その際有力な個人を嘆願の相手として直接その身体にすがって訴えかける場合（これはふつうヒケシアー　ἱκεσία と呼ばれる）と、神聖な神域あるいは祭壇に駆け込み、公の土地の支配者に保護を要請する場合（これはふつうアシューリアー　ἀσυλία と呼ばれる）とがある。嘆願を受けた側は、たとえ有力な土地の支配者であっても支配下の市民の同意を得た上でないと嘆願を受け入れることはできない。事情によっては嘆願者を迫害する側と市を挙げての戦争状態に入ることも覚悟しなければならないからである[2)]。

本篇は、テバイ攻めでの敗軍アルゴスが遺体収容を求めながら勝者テバイ側の干渉を受けてこれを果せず、アテナイ市に援助を求める嘆願劇となっている。先に述べたように、一面ではソポクレスの『アンティゴネ』と同じく戦死者の遺体収容に物語の発端をもつが、遺体の収容と埋葬の意義そのものは『アンティゴネ』の場合と異り自明のものとなっていて、改めて問題視されることはない。問題は、遺体を収容する物理的能力を欠く者がいかにしてそれを可能にするかである。そこに弱者から強者への援助嘆願という行為が生まれる。そしてそこにアテナイという当事国以外の第三の国家共同体が介在することによって、事態は俄然現実的時事的な政治ゲーム的様相を帯びてくる。推定される上演年代（前420年代後半）当時の時代背景を考慮すれば、単なる嘆願劇以上の相貌が現われてきそうである。以下作品を読み進みながらこうした点を検証していきたい。

１.「神の法」から「全ギリシアの掟」へ

死者を祀る行為は、どの民族においても古くから父祖伝来守り続けられてきた重要な生活上

の儀式である。ギリシア民族においても同様であることは言うまでもない。わたしたちはそれを、アンティゴネに関する伝承を劇化したソポクレスの作品『アンティゴネ』によって知ることができる。

オイディプス亡きあと、二人の息子エテオクレスとポリュネイケスがテバイの覇権をめぐって争い、エテオクレスがこれを手にする。敗れたポリュネイケスはアルゴスへ逃れ、そこのアドラストス王の娘を娶り、義父アドラストスの力を借りて祖国テバイを攻める（その攻防の様子をテバイ王エテオクレスの側から描いたのが、アイスキュロスの『テバイ攻めの七将』である）。アルゴス軍は城壁都市テバイの七つある城門を選りすぐりの大将七人がそれぞれ攻めるが、そのうちの一つヒュプシスタイ門を担当したポリュネイケスは、そこで兄弟のエテオクレスと相対峙し、一騎討ちの果てに双方ともに落命する。辛うじてアルゴス軍を撃退したあとエテオクレスに代わって新しくテバイの王座に就いたクレオンは、愛国者エテオクレスは国葬をもって遇するが祖国を攻めた逆賊ポリュネイケスの屍は城門外に放置して禽獣の餌とせよという埋葬禁止令を発布する。二人の兄弟の妹アンティゴネはこれに反発する。たとえ逆賊であろうとも血縁の兄を埋葬することは、親族にとって、いやその前に人間として守るべき当然の責務（アンティゴネはこれを「文字にこそ記されてはいないが神々の定めたゆるぎない掟 ἄγραπτα κἀσφαλῆ θεῶν / νόμιμα 454～455」と言っている）であるとして埋葬行為を敢行する。しかしこれは国法に違反する行為である。そのため彼女は罰せられて命を落す。

ここには戦死者の遺体収容と埋葬の問題――それは時によっては国法に違反しても行われるべきか否かという問題が提起されている。アンティゴネが兄ポリュネイケスの埋葬を禁令に反しても敢行するのは、彼女の中では神の法が人為的な国法に優越しているからである。アンティゴネを処罰するクレオンも神の法の存在を知らぬわけではない。しかし戦後の混乱期に急遽統治者の地位に就いた身としては、まず共同体の秩序の回復を優先するために強権的にならざるをえない。それが市民の大多数を救う途であると、そしてそのことは決して神意に反するものではないと彼は確信しているからである。妥協を知らぬ両者の角逐は悲劇に終わる。アンティゴネも、そしてクレオンも、国家と個人の問題をそれぞれの立場でその身に引き受け、悩みつつ行動することになる。戦死者の遺体の収容と埋葬に端を発した問題は、当事者たちの思想信念と行動の問題に立ち至ることになるのである[3]。悲劇『アンティゴネ』は「人間いかに生きるか」が問われている問題劇なのである。

同じテバイ攻めの戦死者の遺体収容と埋葬の問題をアルゴス側からの視点で捉えた本篇『嘆願する女たち』は、さてどのような劇と考えられるだろうか。本篇でアンティゴネのように遺体の収容と埋葬を要求するのは、テバイの七つの門をそれぞれ担当して攻め討ち死にをした七人の大将の母親たちである。そしてこの母親たちは本篇の合唱隊を構成している[4]。母親たちという複数の存在が一個人のアンティゴネと同様に遺体の収容と埋葬の是非に関して、その個

人的見解を開陳し問題化することは、できないことはないとしても、かなり困難である。エウリピデスが意図したのはそうした理念の問題ではなく、それ以後の具体的な方策また措置、およびそれに伴う諸問題を劇中で描くことである。そこには弱者から強者への支援の嘆願という行為、そして嘆願を受けた者と迫害者との政治的抗争が介在することになる。話の筋に沿って具体的に述べよう。

舞台はアテナイ近郊エレウシスのデメテルの神域である。そこに今テバイ攻めで斃れたアルゴス軍の七将の母親たちが、息子らの遺体収容を求めてアテナイ王テセウスの母アイトラに援助を嘆願しているところである。そのアイトラがプロロゴスを述べる。母親たちの窮状に同情したアイトラは、遺体収容を阻む戦勝国テバイを「神の法 νόμιμα θεῶν」(19行) を蔑ろにする振舞であると非難する。ただ事態はか弱い女の手に余る。母親たちの嘆願を受け入れるか否かの判断は息子であるアテナイ王テセウスに委ねようと、使いを出して呼び寄せる。「何事も男手を通して行なうことが／女の身にはふさわしいのですから」(40～41行)。

到来したテセウスは、母親たちと行を共にしていた敗軍の大将アドラストス王から改めて遺体収容の援助を嘆願される。しかしテセウスはアドラストスが起こしたテバイ攻めを軽挙であったとして非難し、嘆願を断念して退去するようにと言う。これを聞いていたアイトラは息子テセウスを諫め、嘆願を受け入れるようにと忠告する。

ところがいま、考えてごらんなさい。それができればそなたに
どれほどの名声をもたらすか。吾子よ、恐れることなく申しましょう。
力に驕り、死者たちが葬送と埋葬の儀に
与ることを阻げようとする輩をば、
是非ともそなたの手で黙らせて、
全ギリシアの掟を乱すのをやめさせて
もらいたいのです。
［・・・・・・］
人は言いますよ、腕が縮こまっているぞ、
そなたの国に栄誉の冠を戴いてしかるべきときなのに、
それが恐れ戦(おのの)いている、やったことといえば野猪と闘って、
ちょっと手古ずったくらいのことだ、
兜と槍の穂先とに対面して一戦交えねばならぬとなると
腰抜けであることが知れてしまったと。
ねえ、我が子ともあろう者に、わたくしそんな真似はしてもらいたくありません。
知ってのとおり、そなたの祖国アテナイは無思慮だと嘲われたら

その相手を睨み返すだけの力はもっています。

（306～322行）

ここに「全ギリシアの掟」という概念が登場する。七将の母親たちとアドラストスの嘆願を容れて遺体収容に尽力することは、すなわち相手に「全ギリシアの掟」を遵守させることになり、その結果としてこちらには名声と栄誉が約束されるというのである。さらには相手を恐れて腰抜けと言われないようにと、息子テセウスを叱咤激励する。これを受けてテセウスが言う。

やりましょう。わたしはこれから出掛けて行って、死体を解放するよう
説得してみます。それでできねば、そのときは武力に訴える
ことになりましょう。それなら神仏の妬みは買いますまい。
これを是認することを、わたしは国全体にも求めたい。
わたしが要求すれば認めてもらえようし、さらに理由（わけ）を明かせば
国びとはいっそう物分かりがよくなってくれよう。
なんとなれば、わたしは国民を一つの政権の下に束ね、
万民平等の権利をもつ自由国家としたからだ。
わたしはアドラストス殿をわが意見の証人に仕立て、
国民大衆のもとへ赴き、これを説得して
選り抜きのアテナイの若者を集め、ここへ
連れて来よう。そうして武装を整えた上でクレオンに、
死者の身柄引き渡しを要求する書状を送ることにしよう。

（346～358行）

かくしてアイトラはテセウスを説得することに成功する。七将の母親たち、またアドラストスの嘆願は、このアイトラの説得が介在することによってテセウスに受け入れられたのである。その最大の要因は何だったろうか。それはおそらくアイトラの話の中にある「全ギリシアの掟」という一句であったように思われる。なぜならテセウス自身も、このあとテバイの使者に向かって遺体収容にアテナイが乗り出す理由として、それが「全ギリシアの掟 *τὸν Παν*ε*λλήν*ω*ν νόμον*」（526行）と言い、また「これは全ギリシア共通の問題 *πάσης Ἑλλάδος κοινὸν τὸδε*」（538行）と言っているからである。

アドラストスもテセウスに向かって「遺体の埋葬はダナオイびと[5] 全員の願うところです」（130行）とは言う。しかし敗者の弱身ゆえか、それを一般化普遍化させて「全ギリシアの掟」あるいは「神の法」であるとまでは言いえなかった。アイトラは第三者の立場からそれを汲み

取るかたちで「全ギリシアの掟」と普遍化し、テセウスに受け入れ易くしたのである[6]。

「神の法」と「全ギリシアの掟」とは、その精神において同一である[7]。しかし前者があくまで普遍的かつ理念的領域に留まるものであるのに対して、後者は少しく限定的でより具体的な現実の世界での、さらに言えば政治的駆け引きの場での適用が意図されたものであると言える。国際政治の場にあって日頃現実的な折衝に身をやつしている者にとっては、「全ギリシアの掟」とは現実世界ですべからく遵守さるべき掟、いわば国際法の謂である。テセウスとしては「神の法」をと言われるよりもよほどインパクトのあるものだろう。テセウスはこの国際法を守るべく立ち上がる。かくして問題は現実の世界、政治の場へと移される。

２．嘆願される側

テセウスは嘆願を受け入れた。だが遺体収容までにはまだ幾つか段階がある。彼はまず支配下のアテナイ市民を説得して、その同意を取り付けなければならない[8]。先の引用（第１章）にあるとおり（352～353行）、アテナイは万民平等の民主制の国家であるから支配者といえどもその一存で物事を決することはできないのである[9]。

さて、国民への説得はつねにスムーズに行われるとは限らない。同工の作品であるエウリピデスの『ヘラクレスの子ら』では、嘆願を受けたアテナイ王デモポンが下された神託を楯に市民らの説得を渋り、けっきょく嘆願する側のマカリア（ヘラクレスの娘）が自らの生命を犠牲にすることによってやっとアテナイ側の援助を引き出すことに成功する[10]。しかし本篇ではいとも簡単に同意が得られている。「いや、じっさいわが国はわたしの意のあるところを汲んで／この難儀な仕事を喜こび勇んで引き受けてくれた」（393～394行）とテセウスが言うとおりである。

市民の同意を得たテセウスはテバイに対し、文言による説得と武力による強行解決という硬軟両様の作戦を立て、まず使者を先方へ送って説得を試みようとする。そこへ折よくテバイから使者が到来し、アテナイがアルゴス側に肩入れすることに反対の意を表明する。それに対してテセウスは、「全ギリシアの掟」を言い立ててその不当性を主張する。具体的な内容は以下のとおりである。

①そなたらがアルゴス勢から被害を蒙ったと言っても
　彼らはもう死んでしまったのだ。そなたらは敵を見事に撃退した。
　彼らは恥辱を味わった。正義は果たされたのだ。
　であるから、死体を土で被うのを許してやってはどうだ。
　魂は大気の中へ、肉体は大地へと、

それぞれがこの世へ生れてくる前の場所へ
戻してやるがよい。

(528～534行)

②もしも死者からその受けるべき扱いを奪い、
墓無しのままにしておくということになれば、だってこれが慣わしとなれば
強者の心にも怯えが生れてくるのも当然だからだ。

(539～541行)

③われらの人生は闘いなのだ。明日にでも幸運を摑む
者もいれば、もっとあとになる者もいる。今日だという者もいる。
ことほどさように運を司る神は気まぐれなもの。

(550～552行)

④さあ、これで事の結末は見えたはず。死者の身柄をお引き渡し
願おう。埋葬してやりたいのだ、敬神の念篤くありたいと願うわれらは。
いやだと言うなら、あとは言わずともわかろう。出掛けて行って力ずくで埋葬するまでだ。

(558～560行)

テセウスは①で「魂は大気の中へ、肉体は大地へと（返すべし）」と言う。ここには古来人間の生活に根差した死者への鎮魂の思いが表出されている。いわば「神の法」の遵法精神の一端が披瀝されていると見なされるのである。

②も同様に死者の尊厳を説くものであるが、その語調には些か現実的な色あいが醸し出されている。死後の扱いが丁重なものでないと、戦場にある人間は勇敢な働きができないというのである。この考えは珍奇なものではない。エウリピデスは本篇に先行する（とされている）『ヘカベ』においても、オデュッセウスの口を借りて同様な考えを披瀝している[11]。いずれもペロポネソス戦時中のアテナイ市民の思いを反映させたものでもあろうか。

③は神の気まぐれ、世のはかなさに触れたものである。人間万事塞翁が馬で棺を覆うまで人の生涯の幸不幸は定まらぬとあれば、順境にあるときこそ節度を保つべしと説く。そして最後に、④テバイ側がこの説得に応じないとあれば武力に訴えると、最後通牒を出す。テバイの使者はあくまで譲らず、談判は決裂する。テセウスはアテナイの兵を率いて出陣し、テバイ軍に勝利する。アドラストスや七将の母親たちの願いどおり遺体は引き取られ、エレウシスまで運ばれてくる。テセウスは嘆願を引き受けた身の責務を見事果たしたことになる。

当初乗り気でなかったテセウスは母アイトラの忠告を受けて遺体収容に乗り出した。それを果たせば名声と栄誉が約束されるからであった。“「全ギリシアの掟」擁護”がスローガンとなる。遺体収容に尽力する前提として、まず自国の市民の賛同と承認を取り付ける。次いで実行段階に入るが、まずは相手を説得することで事の解決を図ろうとする。しかしこれが失敗したあと実力行使に及び、相手を屈服させて目的を達成する。これら一連の行動は、嘆願を受けた者の身の処し方として非の打ち所のない振舞いである。

戦場でのその天晴れな大将ぶりも、使者の口を借りて報告される。テセウス率いるアテナイ軍とクレオン指揮下のテバイ軍がテバイの城壁の前で相対峙する。テセウスの意を受けたアテナイ軍の伝令がまず口上を呼ばわる。

静粛に、おのおの方、静粛に。カドモスの裔の兵らよ、
お聞きあれ。われらは屍を求めて参った者。
弔いをしてやりたいのだ。全ギリシアの掟を
守りこそすれ、無用な殺生は望むところではない。

（669～672行）

クレオンはこれを無視する。彼は国際法に違反したことになる。正義はテセウスの側にある。戦闘が始まる。激戦ののちテバイ軍は城内へ敗走する。そのときの様子を使者は以下のように告げる。「テセウス殿はすればできたのに／城内に入るのをとどまった。その曰く、出張って来たのは／城市を陥すためではない。遺体引き取りのためだったからと。／戴くべきはまさにこのような指揮官。／現場にあっては勇敢、／驕れる大衆はこれを憎むという御仁だ」（723～728行）。テセウスは沈着冷静かつ心配りの行き届いた指揮官として称讃の的となる[12]。テセウス称讃はすなわちアテナイ称讃である。同工の作品『ヘラクレスの子ら』同様、エウリピデスはテセウスという指導者、そしてアテナイという共同体をかく描くことによって、愛国詩人となったのである。

3．葬送

テセウス麾下のアテナイ軍は遺体の収容に成功する。そしてエレウシスの神域まで運ばれて来た七将たちの遺体[13]を前に、テセウスは次のように言う。

いったいどうしてこの者たちは雄々しさの点で
衆に卓れた者となったのか。

［・・・・・・］
わたしの見たところ、城市を陥そうとの願いを込めた
彼らのあの勇敢な行為は、いや言葉に尽せぬ立派なものだった。

（841～845行）

これに応じてアドラストスは七将それぞれの市民としての人間性の美点を挙げて、これを称揚する。葬送演説である。

カパネウスは富者でありながら心驕ることなく、また友情に篤く人柄も穏やかであるとする。エテオクロスは清貧に甘んじながらその性清廉潔白で、金品に心奪われることなく、また国政を過つ者は憎むが国を憎むことはなかったとされる。ヒッポメドンは歌舞音曲を蔑む尚武の徒。パルテノパイオスはアルカディア生れのアルゴス育ちながら、生粋のアルゴス人と同様にアルゴスの国に身を捧げた男、容姿端麗ながら身持ちの固い若者と評される。テュデウスは戦いに精通し、戦闘技術では完璧の域に達していた男で、名声を求める気概に溢れ、その意識の赴くところ言葉よりも行動にあったとされる。アムピアラオスとポリェネイケスの二人は、テセウスが代わってこれを勇者と称揚する。

ここではアルゴス勢のテバイ攻めそれ自体の是非は一切問われない。戦いに参加した者らの戦いの場での働き具合い、戦士としての有能（アレテー）さ、また日常の生活の場での有りよう、その人間としての特質のみに、しかもいずれもそれを讃美する方向で目が向けられている。先に見たように、今回のテバイ攻めについてアドラストス王は軽挙妄動したとテセウスから手厳しく非難されていた（229行以下）。しかしこの時点ではそれも看過されている。アドラストスの旗揚げは、あたかもテセウスとアテナイの声望を上げるのに恰好の場を提供したかのごとくである。発端はどうであれ、戦の庭に散華した勇者らをひたすら褒め称えるのは作者の皮肉であろうか[14]。あるいは執筆時の政治状況を背景とする現実的な意図を含むものであろうか。それとも敗北の美学の美意識の一端を披瀝するものでもあろうか。

たとえばカパネウスである。彼はその増上慢の罰にゼウスの雷火を喰らって死んだ男である。テバイの伝令はテセウスにこう言う、「あなたは増上慢（ヒュブリス） ὕβρις のゆえに滅びた連中の屍を集め、埋葬してやろうというのですか。／いや、雷火に撃たれたカパネウスの身体が黒焦げになっているのは／正当な報いではないとは！あれは城門に襲いかかり、／梯子を立てかけ、神が望むなら、いや望むまいとも／城市を攻め落してみせると誓ってみせた男なのに」（495～499行）と。

しかしアドラストスはカパネウスの増上慢にもゼウスの雷火による懲罰にも一言も触れず、もっぱらその友情に篤い穏かな人柄だけを称揚している。テセウスもそれを容認するごとく、そこに何ら容喙することはない。否、彼（ら）の行為を「雄々しさ εὐψυχία」（841行）、「勇

敢さ τολμήματα」(845行) という言葉を用いて褒め称えている。敵(テバイ)と味方(アルゴス)で評価が正反対になるのは当然であるとしても、第三者のテセウスにも肯定的な評価をさせることによってアドラストスの言い分を認めさせたことは、そこに作者の時代背景を考慮した現実的な意図が含まれていると見てもよいだろう。しかもテセウスはくだんのカパネウスの屍だけを、他とは別にただ一体デメテル神殿の傍らに葬るという特別措置を講じている(935〜938行)。元来テセウスは敬虔な男である。最初アドラストスから嘆願を受けたとき、彼はこう述べて拒絶した。

いや、われらは贅沢が過ぎるのではなかろうか。生きていく上で
これほどまで神から環境を整えてもらって、まだ不充分だというのは。
ところがひたすら神を凌ぐことを追い求め、
胸中に慢心(カウロン) γαῦρον が昂じて
神よりも知者であるとまで思い込む。
そなたもまた御多分に洩れぬ。愚かにも
ポイボスのお告げに縛られて娘御を異国の者と
妻合せたのだ、神の意向だと言わんばかりに。

(214〜221行)

これはアドラストスだけに向けて発言された言葉ではない。自戒も含めての発言だろう。しかしとにかくテセウスは、増上慢が神から手酷い懲罰を喰らうということは弁えていた。そのテセウスが増上慢の体現者カパネウスを、いまその武勲のゆえに称揚し、その遺体を特別の意を込めて埋葬してやろうとしている。これこそ嘆願を受けた側の者が往々にして陥る矛盾の陥穽に外ならない。そしていま観客はカパネウスのかつての増上慢を忘れ、いまの散華を悼みかつ称えねばならないのである。ここまでテセウスを変わらせるのは、やはり母親アイトラの介在であり、かつ彼女の言う名声と栄誉、そして何よりも「全ギリシアの掟」の存在であろう。

カパネウスの葬送は、しかしこのままでは終わらない。いま一つ事件が出来する。カパネウスの妻エウアドネの殉死である。夫カパネウスの死を知ったエウアドネは警戒する父イピスの目を盗んで家を飛び出し、エレウシスの神域までやって来る。そして岩場の上から夫の屍を焼く薪の中へ身を踊らせ、共に死のうとする。

名誉ある死こそわが願い。
この岩場から跳んで
火の中へ、そして

この身は愛しい背の君と
ともにきらめく炎に包まれたい。

（1015～1020行）

そこへ父イピスが駆けつけ、娘の行為を止めようとする。

イピス
そんな姿で墓所へ、火葬の火へ身を寄せようというのか。
エウアドネ
これからわたくしは栄えある勝利者となるのです。
イピス
どんな勝利を得るのだと？その口から聞かせてもらいたい。
エウアドネ
天が下のすべての女性に勝る勝利を。
イピス
アテナの御業[15)]によってか、それとも心ばえの良さによってか。
エウアドネ
人の道（アレテー） ἀρετή においてです。夫のあとを追い、死んで寄り添います。

（1058～1063行）

上に見える「人の道（アレテー） ἀρετή」とは、人間性において卓越しているという意味である。もっと簡略に言えば、エウアドネは女性であるから「婦徳」ということになろう。彼女は夫の死に殉じることによって「婦徳」の点ですべての女性に勝るという評判を獲得しようというのである。トゥキュディデスはペロポネソス戦争開戦直後の前431年冬、開戦劈頭で不運にも斃れた兵士らを追悼する国葬の場で有名な葬送演説を行なったが、その掉尾で息子を失った親や父親に死なれた子供たちを慰め励まし、その身の処し方を諭したのち、夫を失った妻女に対しては次のように言っている、「この度、夫を失うこととなった人々に、婦徳 γυναικείας τὴ ἀρετῆς について私から言うべきことはただ一つ、これにすべてのすすめを託したい。女たるの本性に悖らぬことが最大のほまれ、褒貶いずれの噂をも男の口にされぬことを己の誇りとするがよい」（トゥキュディデス『歴史』2、45、久保正彰訳、岩波文庫）と。時代は愛国の母、愛国の妻を求めていた。エウアドネはトゥキュディデスの忠実な弟子であった。彼女はアテナイの国是の忠実な体現者として登場しているのである。このようなエウアドネを登場させることによって、作者エウリピデスは愛国詩人となったのである。

エウアドネの登場がペロポネソス戦時下のアテナイ市民の戦意昂揚を意図するものとして観客にアピールしたと思われるのに対し、懸崖の上から火葬の薪の上へ跳び降りるというスペクタクル満点の演出法もまた観客受けのするものであったろうと思われる。しかしこのエウアドネの跳び降りという危険きわまる行動は、じっさいにはどのように処理されたのだろうか。エウリピデスは『オレステス』（前408年上演）でも役者に危険な所作を要求している。ヘレネに仕えるプリュギア人の奴隷が館に押し入って来たオレステスらに追い散らされて屋外に逃げ出してくる場面である。

アルゴスびとの剣で殺されるところを
逃れて来ました、このアジア風の靴をはき、
柱廊の杉の梁を越え、
ドリス風の造りの壁を越えて。

（1369～1372行）

通常ここは、プリュギア人の奴隷が館の階上のどこかから、あるいは屋根から跳び降りて逃げて来たと、そう言っていると解釈されている。館（舞台奥の楽屋の建物スケネ）の屋根といえば5、6メートルの高さになるだろう。そこから跳び降りるとなるとかなりの危険が伴う。俳優は自分の身に身体的危険が及ぶのを避けるためにシナリオを改竄し（もちろん原作者死去後の前4世紀になってからのことであるが）、上の引用部分の直前に合唱隊（の長）の次のようなせりふを付加挿入して解決を計ろうとした[16]。

おや、館の門が軋る音がします。
静かに！プリュギア人が一人出て来ます。
あの男に館の中の様子を訊いてみましょう。

（1366～1368行）

こうすれば俳優は高所から跳び降りる危険を冒さないで済む。しかしこのせりふを挿入すると、すぐ次の箇所で館の高いところから跳び降りると言っているから互いに矛盾することになる。この矛盾を解決するために、後世挿入されたという部分（1366～1368行）をやはり削除して元通りとする。その代わりプリュギア人が跳び降りたと言っているのは屋外の観客に見えるところではなく、観客の目に触れない館内であるとしておけば、じっさいに跳び降りる行為はしないで済み、身体的危険は回避できるという説、あるいは屋外の観客の目の前で所作するとしても、危険でない高さまで壁面を伝い降りて、そのあと地上へ跳び降りたとする説などが立

てられる。

今ひとつ、ここに運動能力に秀でた身軽な者を配し、高所からでも無事に着地せしめたということも考えられないではない。この点はエウアドネの場合も同様である。懸崖の上から燃える薪の上へ跳び降りるエウアドネ役には運動神経の発達した俳優を配し、地上には衝撃を和らげるマット状のものを配置すれば、シナリオ通りの演出は可能だろう[17]。いわば歌舞伎のトンボの大掛りなものである。この場面は観客に興奮と驚嘆を呼び起こすケレン味たっぷりな見せ場である[18]。エウアドネは一方で愛国の妻を演じることにより、また他方でこのスペクタクルの主役を演じることにより、観念的にもまた視覚的にも観客に強烈な印象を残すことになろう。

４．アテナの忠告

火葬のあと七将の子供らが遺骨を収めた骨壺を胸に抱いて登場し、悲しみの歌をうたいながらアドラストスや七将の母親たちともども故郷アルゴスへ帰って行く。そのアドラストスを目の前にしてテセウスが言う、「これ（遺骨）を、わたしおよびわが国はこの者ら（子供たち）に与える。／そなたら（アドラストスと母親たち）はこのことを心によく刻みつけ、感謝の念を／忘れず、わたしから受けたものをよく心に弁えて／この子らにも同じように言って聞かせるのだ、／わが国を尊重すべしと。そして子々孫々受けた思いを／忘れずに申し送りすべしとな」（1168～1173行）と。これは嘆願を受けそれを叶えてやった側として当然の要求だろう。これに応えてアドラストスは言う、「テセウス殿、万々承知しております、あなたがアルゴスの国に、／それが必要な折にどれほどの善行を施してくださったか。／感謝の気持ちはいついつまでも古びることなく持ち続けます。ひとかたならぬ／お世話をいただいたわれらは、それをあなた方にお返しするのが務めですから」（1176～1179行）と。嘆願して願いを遂げた側も、また嘆願を受けてそれを叶えてやった側も、双方満足して一件落着したかに見える。これで劇は終わってもよい。だがこのときアテナ女神がデウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神）として登場する。劇が神の超人的力を必要とするほど錯綜した状況にあるわけでもない、この時点で神を登場させる意図は何だろうか。

アテナが言うのはアルゴス側の忘恩への警戒である。女神はテセウスに向けて次のように言う。

その遺骨はそう易々と手放してその子らに渡し、
アルゴスの地へ持ち帰らせてはなりません。
そなたの国が支払った苦労の代償に
まずは誓約を取るのです。そこのアドラストスに

誓わせなさい。その仁は独裁君主ですから
ダナオイびとの地全土を代表して誓う資格がある。
誓いの中味はこうです。アルゴス人は以後一切この国へ
敵軍として軍兵を送り込まぬこと、また他国がこの国に対して動いたときは
これを武力で阻止することです。そして
もしアルゴス人がこの誓いを破ってこの国へ再び侵攻するなら
アルゴスの国は無惨な最後を迎えるようにと、神に訴えるがよい。

（1185～1195行）

続いてアテナは、テセウス家に伝わる青銅の鼎（かなえ）の上で犠牲の羊の喉を裂き、鼎の内部の壁にこの誓いの句を書き込み、デルポイの守護神に託すようにと命じる。こうすることで全ギリシアがこの誓いの証人となるようにである。これによって単なる口約束が公的な約定となる。その第三者の公認の下での約定をアテナ女神はテセウスに勧めるのである、「亡骸（なきがら）は、こうしたことをきちんとした上ではじめて国外に出すことです」（1210行）と。

一方、アテナ女神はアルゴスの国の子らに向かって次のように言う。

そなたらが成長した暁にはイスメノスの流れの都をば攻め落とし、
死んだ父親の仇討ちをするように。
アイギアレウスよ、そなたは新たに父に代わる大将となるのだ。
また父親がディオメデスと名付けたテュデウスの息子も
アイトリアから馳せ参じよう。
［・・・・・・］
そなたらはギリシアの地でエピゴノイと呼ばれ、
のちのち人々の歌にうたわれることになろう。
その遠征事業は神の加護の下に行われる。

（1214～1226行）

ここに予言されているエピゴノイ（後裔の意。ここでは七将の子供たち）による復讐戦は伝承のとおりである。伝承では復讐戦は勝利に終わり、アルゴス軍はテバイの城市を陥した。

トゥキュディデスは前424年冬のアテナイ軍のボイオティア作戦失敗（デリオンでの惨敗）を告げている（『歴史』巻４、96）。そして敗れたアテナイ側がボイオティア勢に遺体収容を申し入れる条りの記述がある（同97）。この歴史事実が本篇の上演年代推定（前424年以降[19]の一つの要因となっている。上に引いたエピゴノイにまつわる予言も、ボイオティアの首邑テバイ

を再度攻める話であるから、アテナイにとって現実の対ボイオティア戦と決して無縁なものではなかろう。またアルゴスはその地理的位置から、スパルタを敵とするペロポネソス戦争を考えるとき、アテナイにとってその帰趨は重大な意味をもった。そのアルゴスのアドラストス王に誓文を取った上で遺骨を返すという話は、ペロポネソス戦時下にあってはにわかに現実味を帯びてくる話である。殊に上の引用の1193～1195行の箇所と前420年夏の時点でのアテナイとアルゴスの関係を活写したトゥキュディデス『歴史』の巻５、47節を突き合わせてみれば、その感が一入深くなろう。そこではアテナイ、アルゴス、マンティネア、エリス各国間で締結された相互安全保障条約が詳細に記載されている。

アテナ女神の登場とその助言は、こうした現実世界の政治状勢を踏まえたアテナイ人たちの現実的な願望のなせる業なのである。その願望を汲み取った作者が、アテナを登場させることによってそれに応えようとしたのである。

本篇に付けられたヒュポテシス（古伝梗概）は、本篇をアテナイ讃歌 τὸ δὲ δρᾶμα ἐγκώμιον Ἀθηνῶν であるとしている。通覧してそれは妥当な評価だと思われるが、問題は作者に讃歌を書くことを意図させたものである。そこには前420年代のペロポネソス戦時下の各ポリスの政治的駆け引きという現実的な問題が色濃く反映していたと想定される。同じエウリピデスの同工の嘆願劇『ヘラクレスの子ら』（前430年から前420年代前半の上演と推定される）の末尾で、作者はアルゴス王エウリュステウスにアテナイへの報恩の辞を述べさせている。以下の通りである。「（マラトンの長老たちから成る合唱隊に向かって）わたしが死んだら運命（さだめ）のとおりに埋葬してもらいたい。／パレネの処女神（アテナ）の社の前だ。／そうしてくれれば、そなた（アルクメネ）には好意を、この国には安寧を心がけ、／外来市民としてこの地にずっと居続けることになろう。／だがこの子らの裔の者がそなたらの好意を裏切り、数を頼んでこの地へと／押し寄せることがあれば、わたしはこの上なく／手強い敵となろう」(1030～1036行)。本篇の場合と同様に、“アルゴスの帰趨”が現実の問題として劇の背後にあったのである[20)]。アドラストスによるカパネウス称揚をそのまま黙認するテセウス像も、当時のアテナイとアルゴスの政治的関係を映し出すものと理解できよう。

トゥキュディデスが告げているとおり（『歴史』巻４、97)、デリオンでの敗戦時、戦死者の遺体収容の問題が起きたとき、アテナイ市民の心ある者の胸中には以前市内のディオニュソス劇場で上演されたソポクレスの『アンティゴネ』が想起されたかもしれない。ペロポネソス戦争開戦前に上演された『アンティゴネ』（前441年と推定されている）の作者は、遺体収容の問題を現実に起きた事件と関連づけて考える必要は、まずなかった（と考えられる)。だからこそそれは「神の法」をめぐる理念的な問題として扱われたのである。しかしペロポネソス戦争という内戦が勃発し、遺体収容が戦時下の現実の問題として出来してきたとき、遺体収容と埋葬はもはや理念の問題だけでは済まされなくなる。それはきわめて現実的な、すなわち政治的

また軍時的拘束力をもつ「全ギリシアの掟」と化すのである。

本篇への評価は古来あまり芳しいものではない。ただ古代では人気のある作品であったと言われている。作中で示されるアテナイ讃美はアテナイ市民にとって心地よいものにちがいなかった。加えてエウアドネの自殺場面に凝縮されるそのスペクタクル性、ケレン味また娯楽的要素の横溢も、その人気に与って力あったのではあるまいか。

註

1）Cf. Didymus, in Demosthenem commentaria, 53a. 「事態がさし迫っていた。既に死体が腐りかけていた」『ギリシア悲劇全集』巻10, 87ページ、川崎義和訳、岩波書店、1991年。

2）こうした嘆願行為にまつわる諸事については以下を参照。J. Gould, Hikesia, *Journal of Hellenic Studies* 93 (1973), pp.74～103.

3）それゆえに一方で具体的な遺体の収容と埋葬は等閑視され、劇中でこれ以上話題に上ることはない。遺体の埋葬についてのアンティゴネ（およびクレオン）の思想と行動が問題視されるのであって、埋葬の具体的処置は問題視されない。

4）母親たちは7人ではない。ポリュネイケスの母イオカステ（すでにこの時点では自死している）、またパルテノパイオスの母アタランテはアルゴスの人間ではないからこの場にはいない（と推測される）。一方、アムピアラオスは地中に呑み込まれているし、ポリュネイケスの屍はテバイに留め置かれたままである。棺はいくつあったのか、また母親たちは何名であったのか、特定は困難である。いずれにせよ母親の数だけでは合唱隊の15人という数は満されない。おそらくそれぞれの侍女たちも加わっていただろう。Cf. L. Parmentier et H. Gregoire, *Euripide* Ⅲ., Paris, Les Belles Lettres, 1997, p.100, 101 note.

5）アルゴスびとと同義。

6）久保田は嘆願の場において女性が重要な役割を演じていた可能性があることを指摘している（たとえばトゥキュディデス『歴史』巻1、136のモロッソス人の王アドメトスの后がその一例である）。久保田忠利『古代ギリシアにおける嘆願について――ギリシア悲劇を中心に――』、「古代文明研究」12（1994年）、79ページ、東海大学文明学会。また J. Gould, *op.cit.* p.98, 99 を参照。

7）テセウスは自らの言う「全ギリシアの掟」が、その精神においてアイトラの唱える「神の法」を体したものであることを承知している。また「ギリシアじゅうに噂されるのは許せぬからな。／古くから伝わる神々の掟（νόμοϛ παλαιὸϛ δαιμόνων）がせっかくわたしとこのパンディオンの国（アテナイ）を／頼りにしたのに、踏みにじられてしまったとな」（561～563行）という3行がそれを示していよう。J. Marwood, *Euripides Suppliant Women*, Aris & Philipps, 2007, p.3 を参照。

8）現存最古の嘆願劇であるアイスキュロス『嘆願する女たち（ヒケティデス）』397行以下でもこのことが言われている。

9）元来アテナイを民主制の国にしたのはテセウスその人だとされている。プルタルコス『対比列伝――テセウス――』25を参照。

10）拙稿「愛国の歌――エウリピデス『ヘラクレスの子ら』考」　関西外国語大学研究論集第88号（2008年9月）、127ページ以下を参照。

11）次のとおりである。「いや、戦死した者がそれにふさわしい敬意を払ってもらえないのを見て、／それでもわれらは戦うだろうか、それとも命を惜しむだろうか。／わたしにしても、命あるあいだは／日々得る糧がたとえ乏しくとも、それで充分満足だ。／しかし死ねばやはり自分の墓が相応の扱いを受けるのを見たいと思う。／あの喜びだけは永遠のものなのだから」（『ヘカベ』315～320行）。

12）遺体収容の際、テセウス自ら遺体の傷を洗ってやった（765行）ということも披瀝されている。

13）じっさいには全部で5体（大地に呑まれたアムピアラオス、そしてポリュネイケスの遺体は除く）。これ以外の死者は「キタイロンの山峡に墓をもらっておりまする」（756行）と、すでに埋葬は済まされている。

14）Cf. D. J. Conacher, *Euripidean Drama - Myth, Theme and Structure*, University of Toronto Press, 1967, p.106.

15）機織りの技術。

16）古注に曰く、「この3行（1366～1369行）がエウリピデスの真筆だとは、誰も即座には同意できないだろう。いやむしろ俳優の手になるものと考えられよう。俳優は土宮から跳び降りて怪我をしないように、プリュギア人の衣装と仮面を着けて（入口の）扉を開けて出てくるのである」と。

17）Cf. J. Ferguson, *A Companion to Greek Tragedy*, University of Texas Press, 1973 (1922), p.314, 315.

18）Gregoire は本篇を“一篇の大スペクタクル une pièce à grand spectacle”とした上で、劇の最後になってそれまでの修辞と政治に少々厭きてきた観客にエウアドネ自殺という悲壮なエピソードが提供されると言っている。Cf. L. Parmentier et H. Gregoire, *Euripide* Ⅲ., Paris, Les Belles Lettres, 1997, p.100～101.

19）韻律（イアンビックの音節分裂の比率）の点からも前420年代末と推定される。Webster は『ヘカベ』（前420年代半ば以降）に近いと言う。Cf. T. B. L. Webster, *The Tragedies of Euripides*, Methuen, 1967, p.124.

20）拙稿「愛国の歌――エウリピデス『ヘラクレスの子ら』考」　関西外国語大学研究論集第88号（2008年9月）、123～134ページを参照。

（たんげ・かずひこ　外国語学部教授）